九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデについて

西田，越郎

https://doi.org/10.15017/2332920

出版情報：文學研究. 45, pp.47-64, 1953-03-10. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデについて

西田越郎

ハインリヒ・ハイネは、その著『ルードウィヒ・ベルネ』に於て、彼が一八三一年の春パリに着いて、まず国民図書館を訪れ、Die Manessische Handschrift(現今ではハイデルベルクの大学図書館に保管されてDie große Heidelberger Liederhandschrift と称せられているもの)におさめられたワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデの写本を参観したことを述べている。そしてワルテルをドイツ最大の抒情詩人とよんでいるのである。これは決してハイネの誇張でもなく、またワルテルに対する過褒でもない。ドイツ中世・一二〇〇年頃、ニーベルンゲンリートやグードルンによつて代表される英雄叙事詩とならんで、宮廷叙事詩人としてハルトマン・フォン・アウエ(Hartmann von Aue)、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(Gottfried von Straßburg)、ウォルフラム・フォン・エッシェンバハ(Wolfram von Eschenbach)の三人を挙げることが出来るが、抒情詩人としてはまずワルテルに指を屈せずばなるまい。少くとも、ゲーテ以前のドイツ最大の詩人であることは確かである。後にも見るごとく、彼の作品は騎士の恋愛をうたつたミンネザングに始まり、政治詩・教訓詩・宗教詩に及んでおり、恐らく中世における最も豊かな、そして多面的な詩人であろ

う。このことは彼がいかに豊満な精神の持主であつたかを証するものである。

ワルテルに関しては、既にボードマー Johann Jacob Bodmer (1698—1783) やゴットシェッド Johann Christoph Gottsched (1700—1766) がその作品に注目し、あるいはグライム J.W.L.Gleim (1719—1803) がワルテルの詩を改作するなど、十八世紀に入つてから次第に再び関心を惹くようになつたが、ワルテル研究の真の端緒を開いたのはウーラントであつた。ウーラント Ludwig Uhland (1787—1862) は詩人であると共に、学者としても秀で、特に中高ドイツ文学の権威とされていた。ドイツの民謡あるいは伝説の蒐集や研究に大きな貢献をした人である。彼の Walther von der Vogelweide, ein altdeutscher Dichter (Stuttgart u. Tübingen 1822) によつて、このドイツ中世の抒情詩の巨匠の生涯と文学は、はじめて生気ある正確な叙述を与えられたのであつた。一八二七年ラッハマン Karl Lachmann によつて始めてワルテルの最も信用するに足る全詩集が公刊されて、ここに学問的なワルテル研究が可能になつた。ワルテル研究の新しい道を開拓したのはブールダッハ Konrad Burdach であり、この小論も彼の研究に多くを負うていることを、始めにお断りしておきたい。

まず詩人の生涯について簡単にふれておこう。彼と同時代の詩人によつてその名前が伝えられてはいる。例えばゴットフリート・フォン・シュトラースブルクは、『トリスタン』の刀礼式の場において、同時代の詩人たちについて見事な性格描写を行つていて、ハルトマン・フォン・アウエ、（その名は示されていないが明らかに）ウォルフラム・フォン・エッシェンバハ、ブリッゲル・フォン・シュタイナハ、ハインリヒ・フォン・フェルデケ、ラインマル・フォン・ハーゲナウ等と共にワルテルを挙げて nahtegal（小夜啼鳥）と呼んでいる（Tristan 4619—4818）。しかし彼の伝記というべき文献は今

日ほとんど残つていない。ここに唯一の記録というべきは、パッサウ（後にアクィレイア）の大司教ウォルフガー・フォン・エレンブレヒツキルヒェンの出納簿に、ウィーンに程近きツァイゼルマウエルにて、ワルテルに五ソリディを与えて毛皮外套を買わしめたとあることである。このウォルフガー大司教との関係は、ブールダハの指摘する如く、ワルテルの生涯を考察する上からは、非常に重要な事実なのだが、それは措いて、ともかく彼に関する確たる文献は皆無に近い。しかし彼の作品を仔細に検討すれば、彼の生涯の輪郭と性格をほぼ知ることが出来る。彼は一一七〇年頃に生まれたと推定されている。出生地も審かではないが、バイエルンもしくはオーストリヤという。彼は初めウィーンのバーベンベルク公の宮廷にあつて、彼自らの言葉によればオーストリヤで詩作の道を学んだ（Ze Ôsterrîche lernt ich singen unde sagen）。当時ここにはミンネザングをオーストリヤに伝来したラインマル・フォン・ハーゲナウがいて、その影響はワルテルの初期の詩にもうかがうことが出来る。一一九八年、彼の保護者であつたバーベンベルク公フリードリヒの死によつて、ウィーンを去り、遍歴詩人としての数奇な生活の第一歩をふみ出した。彼は騎士あるいは僧侶の宮廷に身を寄せ、その間フィリップ・フォン・シュワーベン、オットー四世、フリードリヒ二世と主君を換えている。後、彼が熱望して止まなかつた采邑を、ヴュルツブルク近傍に皇帝フリードリヒ二世より授けられて、安定した生活を営み、ほぼ一二三〇年頃歿した。

人間の発展と活動は、その人が生きていた時代や環境に影響され刺戟されるものである。しからばワルテルが生きていた時代の精神、また彼の文学が根ざしている時代のビルドゥングは如何なるものであろうか。

中世の宮廷文学は、叙事詩・抒情詩の別を問わず、その題材を伝説、あるいはフランス文学に求め、形式的にもフラン

スに依存するところが大であつた。殊に十字軍による聖地エルサレム遠征は、更に東洋の要素を附加することになり、文化の国際的色彩を一層顕著にした。ワルテルのミンネザングは南仏プロヴァンスの抒情詩なしには考えられないし、また彼の多数にのぼる政治詩も、Vaganten によるラテン語の政治文学や、トゥルバドゥールの政治文学を前提とするものである。

ワルテルがドイツ抒情詩の発祥地ウィーンのバーベンベルク公の宮廷で詩の道を学んだことは既に述べた。しかしワルテルはフリードリヒ・フォン・ハウゼンあるいは彼の師ラインマル・フォン・ハーゲナウなどの宮廷の因襲に束縛された不自然な、謂わば血の通わぬミンネにあきたらず、かかる伝統をうち破つたのであつた。彼の詩のうちで最も親しまれている「菩提樹の下」(Under der linden) に描かれているように、身分の低い、若く素朴な少女に対する清純な愛をうたつた。これがいわゆる低きミンネ nidere minne である。低きミンネはすでにハルトマン・フォン・アウエにも現われてはいるが、これを高きミンネに高めんとしたのはワルテルをもつて始めとする。勿論低きミンネは当時の宮廷の風俗に反くものであつて、彼はために非難されたが、彼は己をまげることなく清純素朴なミンネをうたつた。すなわちミンネザングにおける彼の功績は、これを社交的遊戯からもつと個性的な抒情詩にしたこと、ミンネザングに簡潔な表現と真実味と自然さとを与えたことにあるといえよう。

ワルテルの現存するミンネザングは、約八〇篇である。しかしそれは彼の詩作の全部ではなく、その他に約一〇〇篇の Spruch (格言詩、短詩とでも訳すべきか) なるものがある。彼以前においては吟遊詩人によつて作られていたにすぎない政治詩乃至教訓詩を、ワルテルは文芸の一ジャンルにまで引上げて、大きな実際的効果を発揮せしめたのであつた。

このような抒情詩人ワルテルが、当時の祖国ドイツの紛乱した政治状態に対して、常に関心を抱き、また皇帝とローマ教皇との闘争にあつては、熱烈な皇帝派であり、教皇を攻撃する痛烈な政治詩を書いているのである。これは甚だ奇異な感じを与えるかもしれない。殊に彼が敬虔な宗教的精神の保持者であり、つねに神に対しては敬順であつたことを知れば、その感はなお一層増すであろう。

これを理解するためには、当時シュタウフェン王朝時代における神聖ドイツローマ帝国皇帝とローマ教皇との関係、更にそれより引き起されたドイツ国内における政治的混乱とに注目しなければならない。由来、皇帝と教皇とは共に神の支配下にあつて、皇帝は物質生活を、教皇は精神生活を司どるものであり、初期にあつては両者の調和が保たれていたのである。フリードリヒ・バルバロッサ（1123—1190）は帝権の伸長をはかつて、国家権力をもつて教会を威圧せんと試みた。また一方、教皇インノセンス三世は教権の優越を主張して、歴代の教皇中でも最も強力な時代を展開した。かくの如く、かつての両者の調和を回復することはほとんど望みがたく、殊に十二世紀末から十三世紀初頭にかけて、ローマからドイツ帝国ならびに帝権に対して加えられた政治的・宗教的圧迫は、常にドイツの帝権を自己のために利用せんとするものであつたから、却つて、ドイツの愛国的感情を煽る結果に終つた。ワルテルもかかる空気を身近に感じては、ドイツ皇帝擁護のために敢然と立ちあがらざるを得なかつたことは容易に想像出来るであろう。実にワルテルの生涯は歴史の重要な転換期にあつたものと言わねばならない。十二世紀の後半、シュタウフェン王朝の支配下にあつたドイツは、フリードリヒ・バルバロッサによつて政治的に大いに興隆をみた。騎士階級の文学的活動が始まつたのもこの時期である。ワルテルが生まれたのはドイツの王権が絶頂に達したバルバロッサの時代であり、その嗣子ハインリヒ六世がドイツの世界支配

を実現した頃に、ワルテルは詩人として出発したのであつた。またフリードリヒ二世が教権との闘争を開始したころ、ワルテルはその盛名の極に達して、皇帝権擁護のための闘士となつたのである。

ワルテルの Spruch の考察に入る前に、ここで彼以前における Spruchpoesie の流れを一瞥しておきたい。ワルテルが Spruch のために用いた詩形は一節（シュトローフェ）よりなるもので、これが Spruch の本来の詩形であつて、ワルテルによつて創始されたものではない。すなわち中世初期の詩人においては専ら一節の詩形が行われた。キューレンベルゲル Der vom Kürenberg の用いた、ニーベルンゲン・シュトローフェと通称されているものはその一例である。政治的・宗教的・道徳的内容を有する教訓詩の場合、その傾向が特に著しかつた。さてかかる詩人たちは Spervogel と呼ばれて、彼らの創つた Spruch が今日伝えられているが、彼らの多くは庶民階級に属する遍歴詩人であつた。一一七〇年頃活動して《der ältere Spervogel》と呼ばれる Herger なる人物があり、またその後にも多数の Spervogel が存在した。彼らの Spruch は七行をもつて一節を構成し、その中にあるまとまつた思想を簡潔に表現したものである。形式的にはまだ極めて素朴で、内容的にも取扱われる素材の範囲は狭いものであつた。ワルテルの Spruchpoesie も勿論この古い伝統の上に立つものであり、同様に一節よりなる詩形を踏襲している。彼は愛顧を受けたオーストリヤのフリードリヒ公の歿後、遍歴詩人として久しく宮廷を渡り歩いたのであるが、その多難な放浪生活において、Spruch の詩人となつた。ワルテルは古来の Spruch の素材を拡大して多様性を附与し、また形式の完成と相まつて、これを真の文芸の一ジャンルに引上げた。すなわち彼の Spruch の特色は、その時代の政治的テーマを取扱つていることである。そのテーマも、初期の Spruch がごく限られた範囲の政治的事件を取上げたのに対して、一国の、或は世界帝国に関するものであつたことを

見逃してはならない。ワルテルは、先述のごとくラインマル或はモールンゲンの影響をうけて、若年のころの作品に於ては未だ南仏プロヴァンスの恋愛詩の束縛を脱し得なかつたが、長い遍歴生活のうちに大きな変化を遂げた。彼のミンネザングには旧来の抒情詩に見られる遊戯の形跡が消えて、もつと個性的な傾向を帯びるに至り、更に国家的な、政治的な問題に目を向けることによつて、ここに彼の Spruchpoesie が生まれたのである。彼をしてかかる転回をなさしめたものは、恐らく当時遍歴生活を続けていたラテン語詩人、いわゆる Vaganten たちの影響であろう。

ワルテルは、その恩顧を蒙つたフリードリヒの死後、ウィーンを去つてフィリップ・フォン・シュワーベンの宮廷に移つた。それはフリードリヒの跡をついだレオポルトが彼に好意を持つていなかつたためらしい。皇帝ハインリヒ六世の死後、その子フリードリヒ二世はまだ三才の幼児にすぎなかつたので、諸侯はフィリップとオットー・フォン・ザクセンを選立した。かくして両陣営の対立から烈しい内乱が起つた。この時、教皇は皇帝の任命権を主張して、オットーを擁立した。ワルテルは直ちに、フィリップのために精力的な活動を始め、教皇インノセント三世を攻撃する。

ワルテルの政治詩は常にこれを耳にする素朴な大衆を考慮において作られた。彼は今やドイツ帝国とローマ、この対立する二大勢力の世界史的闘争を詩に形成しなければならない。そして注目すべきことは、彼が大衆の輿論の代辯者たる立場をつねに捨てなかつたことである。かくして生まれた政治詩は民衆の魂に喰い入る鋭いものであつた。ワルテルについての記録が今日何ら残存しないことは、そのまま彼の詩そのものの無力であつたことの証拠にはならない。インノセント三世攻撃の詩を作つたドイツ詩人ワルテルを指して、イタリーのトマジン・フォン・チルクラリア Tomasin dei Cerchiariは、世人をたぶらかす者なりとして、若干の讃嘆の念を混えつゝ非難を浴びせている。これによつてもワルテルの

政治詩のもつ大きな力を察することが出来よう。

われわれが次に見る一聯の Spruch に盛られたワルテルの、祖国の現状を思ふ心情は、既に述べたような彼の困苦に充ちた長い放浪生活によつて得られた世界認識が基礎になつているものと思われる。即ち彼自ら Ich hân lande vil gesehen（われ諸国を経めぐりぬ）という如く、彼の足跡はセーヌ、ポー、ハンガリー、ミュール、トラーヴェ等にまで及び、その体験によつて、いずこの国よりも祖国ドイツの冠絶せることを意識し、かくて彼の祖国愛が生じたと見ることが出来る。

Ich saz ûf eime steine,
und dahte bein mit beine:
dar ûf satzt ich den ellenbogen:
ich hete in mîne hant gesmogen
daz kinne und ein mîn wange.
dô dâhte ich mir vil ange,
wie man zer welte solte leben:
deheinen rât kond ich gegeben,
wie man driu dinc erwurbe,

der keines niht verdurbe.

diu zwei sint êre und varnde guot,

daz dicke ein ander schaden tuot:

daz dritte ist gotes hulde,

der zweier übergulde.

die wolte ich gerne in einen schrîn.

jâ leider desn mac niht gesîn,

daz guot und weltlich êre

und gotes hulde mêre

zesammene in ein herze komen,

stîg unde wege sint in benomen:

untriuwe ist in der sâze,

gewalt vert ûf der strâze:

fride unde reht sint sêre wunt.

diu driu enhabent geleites niht, diu zwei enwerden ê gesunt. (8, 4) [数字は Lachmann-Ausgabe の頁数を示す]

五五

ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデについて

われ岩上に坐して
膝と膝とをかさね
そが上に肘をばつきて
顎と頬とを
掌にささえぬ
かくてこの世に生くべき道を
思いあぐみて憂いに沈みぬ
朽つることなき三つのものを
いかにして手に入るべきぞ
思い悩めど詮すべもなし
その二つは名誉とこの世の財(たから)
そは互に傷つくることなきにあらず
残る一つは神の恩寵にして
先の二つにまさるもの。
わが望みはこの三つを一つ函におさめんこと。
財(たから)と世のほまれと

また神の恩寵の
共に一つ心臓に入り来らんは
もはや望めず
道はこれすべて塞がれたるなり
不信は道の端にうかがい
暴力は道の上をさまよい
平和と正義はいたく傷つけり
この二つのもの癒えざる限りかの三つのものも行くを得ざらん

これは三つよりなる一聯の Spruch の冒頭にある有名な詩である。製作の年代は不明であるが、ワルテルの最も古い政治詩と考えられている。騎士が心から求める三つの宝、世上の栄誉と、地上の財宝と、また神の恩寵とを、この世において一つに合わすことの不可能を思い悩み、平和と正義の失われたドイツの有様を歎く――かかる状景は、偉大な皇帝ハインリヒ六世の死後生じたドイツ国内の混乱と、彼自らが庇護者フリードリヒ公の死によつて、「楽しき宮廷」（ウィーン）において栄誉と財とを得る希望を失つた一一九八年に最も合致するものではなかろうか。

文学史家ウィルヘルム・シェーラーは、「ワルテルは簡素な言葉でわれわれの心を捉えたかと思うと、やがて魂をゆり動かすよりはむしろ理智を快く働かせるような省察へと移つてゆく。」と言つているが、この詩は冒頭数行における簡潔な

表現をもつて、まず彼の思い悩める姿を具象的にあらわし、それによつて彼の内心の状態が明確に描かれることになる。そして更に省察へと入つてゆくのである。

またそのあとに続く「われ水のざわめくを聞きぬ」Ich hôrte ein wazzer diezen(8,28)において、詩人は流れる水の音をきゝ、魚の泳ぐを見る。また野を、森を、木の葉を、蘆を、また草を、この世のありとしあらゆるものを眺める。野獣といえども王を選ぶというのに、わが祖国の状態は如何。秩序は乱れ、従うべき君主もなく、国民は去就に迷わざるを得ない。かくて詩人はうたう。

sô wê dir, tiuschiu zunge,
wie stêt dîn ordenunge!
daz nû diu mugge ir künec hât,
und daz dîn êre alsô zergât.
bekêrâ dich, bekêre.
die cirkel sint ze hêre,
die armen künege dringent dich:
Philippe setze en weisen ûf, und heiz si treten hinder sich.

されば禍なるかな独乙の民よ

汝の秩序はそも如何に
蚊すらその王を持てるに
汝の栄誉かくも失墜せんとは
悔いよ改めよ
諸侯らあまりに気負いて
あわれなる王らひしめきて汝を逐う
フィリップに王冠を戴かしめよ、彼らをして退かしめよ。

これは一一九八年夏に作られたもの。やはりハインリヒ六世の死によつて、ドイツが陥つた混乱の状態をみたワルテルが、かかる祖国の無秩序に結末をつけよ、そのためにはフィリップを帝位につけよと叫ぶのである。これは前詩に比べると、直接的な政治的傾向が強く出ている。また単に王を選べと叫んだだけのものではないことにも注意しなければならない。ブールダハの云う如く、この純粋に政治的な忠告は、個人的な好意からなされたものではない。世のなりゆき、永遠なる自然を考察した結果としてワルテルはこの忠告を与えているのである。「創造物はすべて、その正義と秩序とを持つている、たゞ人間のみはしからずという聖書に見られる思想を、深い観察者としてワルテルは改めて発見したように思われる。そして彼は、この永遠の闘争を神の欲し給う世界計画(Weltplan)の一部とみる。しかし人間の生活、祖国には確固たる統一的な支配が必要である。たゞ皇帝のみが、強力にこの混沌を支配し得るのだ。これがワルテルの政治的・

道徳的世界観の核心をなすものである。」(K.Burdach , Walther von der Vogelweide. S.44)

それより数年後、教皇インノセントの擁立するオットーとフィリップ、この二人の国王の間に開かれた争いはドイツを更に混乱させた。インノセントはフィリップを倒すべく全力を注いだ。そこでワルテルは、前の二つの詩と同じ調子のものを作つて、禍の根源はローマにあることを述べている。それは「われわれが目もて見たり」 Ich sach mit mînen ougen (9,16) に始まる、三聯のうちの最後の詩である。

ze Rôme hôrte ich liegen,
zwêne künege triegen.

ローマにて偽りいうを聞きぬ
二人の王を欺くを。

次いで一人の klôsenære (隠者) を登場せしめて、

ich hôrte verre in einer klûs
vil michel ungebære:
dâ weinte ein klôsenære,
er klagete gote sîniu leit,

‚owê der bâbest ist ze junc: hilf, hêrre, dîner kristenheit.‘

われは遠く僧房に
大いなる嘆きの声を聞きたり
そこに隠者ひとり泣きいて
おのが嘆きを神に訴えぬ
「あゝ法皇の年若きぞうたてき、主よおんみが教えの子を救い給え」

ワルテルのSpruchのうちには教皇乃至は教皇庁を攻撃したものがある。それらは頗る大胆なものだ。敬虔な宗教心を抱いていたワルテルは、キリスト教とその世俗的代辯者とを混同しはしなかつた。そして彼は僧侶政治（ヒエラルヒー）の支配、教皇庁の陰険な策謀を排して、真正な教会を対置する。それは天上界のことにのみ従つて、世俗界の支配には容喙しない存在でなければならない。キリスト教の信仰の真の精神は今や全く破壊され、神の僕たる者が物を盗み、また人を殺す。僧侶は貪婪極まる存在であり、免罪符の取引によつて神の恩寵が売られるのである。ワルテルは幾つかのSpruchにおいて、ローマこそはドイツ国内の混乱の源泉であり、嘘言や偽瞞の巣窟なることを述べている。一二一三年、教皇インノセントは十字軍促進のための寄附をつのる目的をもつて、ドイツのすべての教会に寄進箱（stoc）を設けさせたが、ワルテルはそこにローマの貪婪以外の何物をも見なかつた。

Sagt an, hêr stoc, hât iuch der bâbest her gesendet,

daz ir in rîchet und uns Tiutschen ermet unde pfendet? (34, 14—15)

言い給え、寄進箱君、君は教皇からわれわれの許に遣わされて来たのか、
彼を富ませ、ドイツ人たちを貧しくするために。

hêr Stoc, ir sît ûf schaden her gesant,

daz ir ûz tiutschen liuten suochet tœrinne unde narren. (34, 23)

寄進箱君、愚かな善男善女を探し求めるという
悪い料簡で君はドイツに送られてきたのだ。

また教皇はドイツ人を愚弄する。

……'ich hân zwên Almân under eine krône brâht,

daz siz rîche suln stœren unde wasten

ie dar under füllen wir die kasten:

ich hâns an mînen stoc gement, ir guot ist allez mîn:

ir tiuschez silber vert in mînen welschen schrîn,

ir pfaffen, ezzent hüenr und trinkent wîn,

unde lânt die tiutschen …… vasten.' (34, 7—13)

わしは一つの王冠の下に二人のドイツ人を集めた。
この二人がドイツ国内を荒すということになる。
その間われわれの財布は膨らむばかり。
ドイツ人は寄進箱に金を入れねばならん。奴らの持物はみなわしの物、
奴らの銀貨はわしのイタリヤ銭箱に流れこむ。
さて坊主諸君、鶏をくい給え、酒を飲み給え。
それからドイツ人には……断食させよう。

ブールダハの言葉を借りて、この論考の結論に代えよう。「ワルテルのSpruchdichtungは、ドイツの皇帝党の帝国主義とイタリヤの教皇の帝国主義との巨大な闘争の、最も雄大な詩的形成である。真の世界皇帝であり、ドイツのあらゆる支配者のなかで最も驚歎すべきハインリヒ六世の死、第四次宗教会議、教皇の世界支配の勝利、すべての教皇のなかで最も強大なる者の制覇――これらは明白な歴史的大事件であるが、ワルテルの生涯と詩は、そのなかで開花し、成熟に達した。彼をのぞいて誰が、この世界を動かしてやまぬ対立や闘争の鼓動を詩に捉えたであろうか。(中略)様式を欠き、興奮し混乱したプロヴァンスのトゥルバドゥールの政治的諷刺詩(Sirventes)のすべても、これとならべる時、何と見劣りのすることであろうか。ワルテルのSpruchのまとまりと重み、彫塑性や劇的な動きと比べる時、Vaganten の天才的な詩のパンフレットさえ何と目立ぬことか。ワルテルのみが、この最大の世界史的素材を、芸術的自由さをもつて、生々しい瞬間より、彼の個性より、国民感情より形づくつて、いくたの人々に最も強い影響を与えたのである。イタリヤの反対者

〔筆者註、前記のトマジン・フォン・チルクラリアを指す〕さえこの影響を不本意ながら認めざるを得なかつた。世界の他の如何なる政治詩人に、同様なことが言えるであろうか。」(K.Burdach, Walther von der Vogelweide. Vorwort XVII.)

（完）

參考文獻

Karl Lachmann, Die Gedichte Walthers von der Vogelweide. 1907.

Konrad Burdach, Walther von der Vogelweide. Philologische und historische Forschungen. Erster Teil. 1900.

Konrad Burdach, Vorspiel. Erster Band. 1. Teil: Mittelalter. 1925.

Ludwig Uhland, Walther von der Vogelweide. 1822.

Anton E. Schönbach, Walther von der Vogelweide. Ein Dichterleben. 1923.

Konrad Burdach, Der mittelalterliche Streit um das Imperium in den Gedichten Walthers von der Vogelweide. (Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 1935. 13. jrg.)

Wolfgang Golther, Die deutsche Dichtung im Mittelalter 800 bis 1500. 1922.

Wilhelm Scherer, Geschichte der deutschen Literatur.

Vogt und Koch, Geschichte der deutschen Literatur von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart. 1923.

相良守峯　ドイツ中世叙事詩研究　昭和二十三年

山西英一訳　ディルタイ　ドイツの文学と音楽　上巻　昭和十九年